特別支援教育の扉 №５４　　令和５年６月１５日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「ギュッと抱き締められたい子ども」

愛着障害は、親の養育を受けられない福祉施設で育つ子ども、被虐待の子どもに限るという考えは誤解であり、通常家庭にも愛着の問題を抱える子どもがいます。子どもを愛さない親はいませんが、子どもの愛し方を知らない親が増えているように思います。

１　虐待が及ぼす影響

発達～言葉や学習の遅れ、認知の偏り、前頭前野の容量の減少

情緒～情緒不安定、自己肯定感の低下、無気力、自己中心性、偽成熟性（大人の顔色を見ながら生活する）

身体～頭痛・腹痛・吐き気・発熱、外から見て分かる傷（打撲・切創）と見えない外傷（骨折、鼓膜穿孔）、低身長・低体重、栄養不良、不衛生な頭髪や衣服

行動～ 親から離れられない、爪噛み、指しゃぶり、強迫行動、多動、暴力的行動、自傷

社会性～登校渋り、他者の気持ちが分からない、人を見て行動する、謝ることが苦手

２　支援について

①具体的な言葉でほめる

ほめられたとき、どんな気持ちになってよいか分からないため感情が混乱する。ほめる部分をしっかり限定し、ほめられたときにどんな気持ちになればよいかを教える。「こうすればほめられる」という一貫した対応をする。

②先手支援を意識して、決定権を握る（愛情欲求エスカレート現象を防ぐ）

子どもが飛び出した後、追いかければ追いかけるほど行動がエスカレートするので、対応を複数決めて、よい方法を共有する。子どもの要求を全て受容するのは後手の支援であり、行動がエスカレートする。選択肢を与え、それが守れたときに目に見える評価をする。

例：気が済むまで抱っこするのではなく、握手に変える、時間を決めてゴールを示す。

③一つの行動だけを行うようにする

禁止は感情混乱を引き起こすので、「これをしよう」と、子どもが許容できる提案をする。

○　国語の時間は必ず１回挙手して発信しよう（これをしようという目標）

×　国語の時間は私語はしない（してはいけない行動を設定しない）

④子どもの気持ちを言い当てる

感情が未発達で、自分や相手の気持ちが分からないので、どうしてそんなことをしたのと聞かれると感情混乱に陥る。「こんな気持ちでやったんだよね」と子どもの感情を推測して言い当てて、子どもの「分かってもらった感」を高める。

⑤「横」で寄り添う対応を心掛ける

注意するときも、話を聞くときも、子どもと同じ方向を向いて寄り添う立ち位置をとる。

⑥保護者への対応（同じ方向を向いて支援する）

「問題→対応→成果」のセットで伝える、第三者を利用する、窓口を一本化する。保護者の性格や特性、発達障害的傾向、愛着障害的傾向を踏まえた対応をする。

「子どもを叱るときには、自尊心を傷付けないように」

子どもに「そういうことはしてはいけない」と叱ることは悪いことではない。あなたは悪いことをしたから叱られたのであって、悪い子だから叱られたわけではないことが伝わるように叱る。叱った後は、「言うとおりにできたね」と認めて、成功体験で終わる。ほめられすぎると、ほめられた実感がもちにくくなる。叱られすぎると、自己肯定感が低下する。どんなときに叱るのか、基準を明確にし、それ以外は穏やかに、繰り返し指示を出す。